

# ハーマン・カーン

角和昌浩 (かくわ まさひろ)

**要約** アメリカ人ハーマン・カーンはシェルのシナリオプランニングの黎明期に大きな影響を与えた。Think Unthinkable、「考えつかないことを考えたまえ」の標語が有名である。軍事理論家だったカーンは1960年、第二次大戦後の冷戦、ソ連の核攻撃への米国の対応を論じた『熱核戦争論』を発表。その後ビジネスコンサルタントに転じた。カーンは米国ビジネス界に日本に注目するよう促した最初の人物だった。1970年に出版された『超大国日本の挑戦』は、日本でも評判をとった。

## 1. はじめに

ロイヤル/ダッチ・シェル（以下、「シェル」という）のシナリオチームの黎明期、思想や技法面で大きな影響を与えたアメリカ人、ハーマン・カーン<sup>1</sup> (Herman Kahn) について書こう。筆者はカーン氏に直接会ったことは、ない。文献を遊学しながらこのひとのやった仕事を理解しようとしている。ウォルステッター（ハドソン研究所）<sup>2</sup>、ルイス・メナード<sup>3</sup>等に拠って書きます。

### 1.1 人となり

1922年の生まれでニューヨーク・ブロンクスで育った。ユダヤ人である。

長じてカリフォルニアのUCLAで物理学を学んだ。第2次大戦中、軍属としてビルマ戦線で電線敷設作業をしたことがある。戦後、UCLAを卒業してカリフォルニア工科大学(Caltec)の博士課程に進学したのだが、両親が早世して学業を続ける資金が足りず、勉学を終えられない。代わりに1947年、カーンにRAND研究所から誘いが入った。カーンを引っ張ったのは後に中性子爆弾の発明者の一人となった物理学者サミュエル・コーエンである。当時RANDは米空軍お抱えのシンクタンクだったので、カーンには空軍や軍事産業との縁ができた。当時の空軍は核戦力を管理運用していたから、ことは重大である。1952年、カーンはフォン・ノイマン率いる水爆研究チームに参加、Lawrence Livermore Laboratoryが職場で、カーン

は国家の極秘情報を扱った。

ところが、反共マッカーシズムが席卷した時代の中、カーンの妻ロザリー・ハイルナーが、共産主義に近い人脈サークルにいる、怪しい、という嫌疑をかけられた。捜査がカーンに及び、極秘情報へのアクセスを禁止されてしまった。

ここでカーンは物理学や数学を武器とするハードサイエンスを離れ、軍事理論家に転身した。数式の世界から、コトバを書き、大いに話し、周囲に影響を与えるという仕事に転身したのだ。

これがこの人物の個性にドンピシャに合った。実はカーンの得意は人前で話すことだった。縦横無尽に冗漫な長舌を振るう。何時間も、時には2日ばかりで話し続けた。IQがとびきり高いので原稿などなくともよく、おびただしいグラフや写真をスライドで映しながらの熱演だった、といわれている。カーンはサービス精神旺盛で、アメリカ人好みのジョークをまき散らして、聴衆を飽きさせなかった。

数式の世界から理論家・著述家へと転身して以降、研究スタイルが変わった。それは、特定の課題に関わる専門家を一か所に集めて集中討論してもらい、そこから着想を得る、という方法。研究者たちが5、6人集まって、もしもこの課題が未来に肥大化したら何が起こるだろう、と想像しながら未来のストーリーを作る。例えばインド亜大陸の将来をじっくり考えたら、「1965年、ベンガル地方で騒擾が起こる」というストーリーが現れたのだ、という。

<sup>1</sup> Herman Kahn, February 15, 1922 - July 7, 1983

<sup>2</sup> John Wohlstetter, "Herman Kahn: Public Nuclear Strategy 50 Years Later A Compendium of Highlights from Herman Kahn's Works on Nuclear Strategy" Hudson Institute, September 2010

<sup>3</sup> Louis Menand, "Fat Man: Herman Kahn and the Nuclear Age", The New Yorker (June 2005)